



発行者 岐阜県立中津高等学校 同窓会
題字は深川校長 英明氏 (20回卒)
タイトルバックは滝川長明氏 (20回卒)

定時制創立五十周年

記念式典開かれる

俳優 田中 邦衛さんを講師に迎えて 梅村 薫(12回卒)

中津高校定時制創立五十周年記念式典が、十月二十四日(土)中津高校第一体育館で開かれた。昭和二十三年(一九四八)年に福岡分校と本校・付知分校が、翌年には苗木分校が、そして二十六年には加子母分校が開校されており、今年はこちらより創立五十周年を迎える。本校と四分校の代表

が集まって昨年より十数回の実行委員会を重ねて、①記念式典の開催 ②記念誌の発行 ③記念アレカの発行を記念事業に決定し、準備を進めてきた。その財源として同窓生・旧職員に募金をお願いし、千人以上の方から目標を超える金額(目標三百万円)が寄せられて、記念事業に対する期待の大きさに実行委員は励まされた。

「夢の実現に向けて」 中津高校定時制創立五十周年記念式典が、十月二十四日(土)中津高校第一体育館で開かれた。昭和二十三年(一九四八)年に福岡分校と本校・付知分校が、翌年には苗木分校が、そして二十六年には加子母分校が開校されており、今年はこちらより創立五十周年を迎える。本校と四分校の代表



のないう定時制五十周年式典を盛大にするため著名な方を是非お招きしたいとの気持ちが高まった。土岐市の出身でもあり、夜間中学を扱った映画「学校」(山田洋次監督)に出演してみえる田中邦衛さんをもっともふわしいと、和田実行委員長(本校定時制同窓会長)が本人に直

接手紙を書かれ、生徒たちもまた「定時制にぜひ来てくだい。」と手紙を書いた。その願いが通じて、「大きな夢」が実現した。《消してはならない大切な明かり》 式典当日は、天候が心配され、式典参加者の数が心配されたが、雨も上がり、ご来賓の方の他に五百名を超える同窓生の参列によって、盛大な式典となった。

田中邦衛さんは、旧制中学を卒業後、地元で新制中学の英語の代用教員を経験した後やと俳優養成所に合格してサンドイッチマンなどの辛いアルバイトをやりながら、素晴らしい人達との出会いに恵まれて自分が成長できたと、自分の若い頃を包み隠さなく語られた。そして「いろいろな事情で定時制を選んだ生徒、悩みや苦しみを抱いた生徒、それを一緒に包み込んで四年間で卒業しようという生徒たちの懸命な思い、それを包み込んで一緒に悩み励ましあつて四年間で無事卒業させようという教師たち、これが教育の原点ではないか」という趣旨の和田会長からの手紙に誠にと述べて次々と思つたと述べられて次の様な話をされた。「私も「学校」の撮影に入ると、中年の人達が真剣に学ぶその眼差しに感動し



た。チベットでは教室に教科書がない、机もなく土間で一生懸命学ぶ子供たち。たった一個のアメ玉に大喜ぶするタイの子供。豊かになった日本が忘れてしまったもの、置いていってしまったものがある。本当の豊かさとは何か、東大とか偏差値とかの教育が置いて行つてしまったものは何だろうか」と大変に大切な視点を問いかげられた。最後は、聴衆の方々の質問に答えるという形式で進められその中で「生活のプロという視点がない」と思つた。例えば、八百屋のおかみさん。いろいろな苦勞を背負いながら黙々と働く庶民。我々芸人はペラペラしゃべる生活のアマチュア。もの言わぬ庶民がたまに口からこぼすものを拾つて暖めて細工して「こんなのが落ちてつたよ」とおばちゃんに放り投げて返してあげる。おばちゃん「まあ恥ずかしい」といつて受け取ってくれる。それが「私達の仕事」です」と含蓄のある話しを結ば

昭和二十四年に設立されて以来、仮校舎、間借り校舎の悲哀を秘め、やがて喜々として独立校舎に移つてのしばらく、その都度廃校の危機を回避しながら幾多の人々の支援を得てまさに細々とたどつた二十年。閉校になつてからでも三十年たつ。もう地元苗木地区でさえ、昔話にかすかに登場するだけとなつた。「まるで水子の供養じゃないか。後輩もいないのにいまさら何で……」という疑問に明確に答えられないまま、行きつ戻りつの実行委員会がなんと二年間に十回も、二十五人の委員がやつとこのこと「想い出のシンボルぐらいあつた方がいい。とにかくやろう」と腹を固めた。 決まれば早い、あれよあれよの一気怒涛で手足が動

碑は高さ一メートル、幅一、一メートルで大小二十三個の石で組んだ二段の上に西向きに建つ。碑文は三十余の候補から「勤労学舎跡(キンロウガクシャノアト)」に落ち着いた。募金も同窓生の三分の二にあたる百五十人で百八万円、予定額もわずかに超えた。 当日は願いが通じたのか紺碧の空、恵那山の裾髪ま

文責/記事 三好 忠博 (苗木分校17回卒)



「私達の仕事」より) 記念式典に引き続いて記念講演が行われた。田中邦衛さんを目見ようと七百七名の人々がさらに会場に詰めかけ、式典参加者とあわせて二百名の聴衆で体育館は超満員となった。

十一月二十九日、定時制苗木分校の同窓生が、かつて校舎があつた苗木中学校の敷地で記念碑を除幕し、本校定時制の五十周年記念事業に触発されて、十七年次にわたつて輩出した約四百四十人の同窓生が母校恋しの気運を盛り上げたものである。

徒と一緒に記念写真に入つていただいた。また、その夜は、木曾路旅館にて、実行委員会や学校職員との懇親会にお付き合いいただき、交流を深めあつた。

で染まる「秋色苗木」。 神主のしみじみとした祝詞が校舎跡一帯に響きわたるにつれて、集まつた八十人の恩師や同窓生はまさに「万感胸に迫る」の肅然半泣き状態。錦の木の葉がカラカラと群れ散るなかにならず、中年から老年の夜学生たち…… 会場を移しての祝賀会と初めての同窓会。実行委員長の可知 清が誇らかに演壇を掃する。「けなげによく頑張つたもんだと思ひます。工場と学校を行き来して明日の希望をもつて学んできた私たち勤労学徒こそ、急成長を遂げた日本経済の象徴であります」、意気やよし、この迫力が思いを形にした。分校初代主任の石田 曠、十年間務めた鈴木一登の両恩師を始めとした十三人の来賓も往時の思いに著の動きも止まりは山あり谷ありの青春回顧。 楽しいときは過ぎるのも早い。和気あいいいに再会を約して短い秋の陽は果てた。みいんな終つた。快い疲れを残して「苗木」が揺れた。

事業実行委員長 苗木分校五十周年 苗木分校同窓会長 (電話0573-66-1313)

「勤労学舎跡」でできる

記念誌・記念レカの申込ご希望の方は、次のところにお問い合せ下さい。 中津川市津川一〇八八の二 中津高校定時制

「苗木に分校記念碑」

「勤労学舎跡」でできる

「勤労学舎跡」でできる

「勤労学舎跡」でできる

『鐘の鳴る丘』



同窓会会長 吉川光彦(5回)

中津高校同窓会全会員の皆さんに御挨拶申し上げるのとは本紙が初めてであります。私は平成九年五月の総会で、郷原前会長の後任に推挙されました。五回卒業生であります。前会長は平成七年十月に母校創立九〇周年記念行事を立派におやりになりました。次なる大事業は創立一〇〇周年と思われ

十一月四日には関東、名古屋で支部総会を開催して頂き有難うございました。私は今年名古屋へ出席させて頂きました。大変に歓迎をして頂き、旧友と楽しい時を過ごすことができました。また、同窓会支部組織をもう少し拡大したいと思っております。例えは岐阜市地域、恵那郡恵北地域に支部ができたら同窓生の連絡網が更に充実するのではと考えております。

目下の経済情勢では誰もが苦勞の多い毎日であります。特に中小企業にとりましては何時になつたら安堵できるのかわりません。こんな情勢では生涯無理かもしれません。が、こんな時には気持ちの和むボランティアをやるのが精神衛生によいのではないかと考えております。今の時代は何かが変わらねばならないと言われます。今は閉塞状態とも言われます。それは体制が活気を失い、只のしがらみとして重くのしかかっている事だと思います。伝統は素晴らしいと言われれば、新しい創造の肥やしとならねばなりません。そんな機能を失った体制は変化を求められます。そんなことを思う時、同窓会はこれで良いのかと常に自問自答しています。母校の創立一〇〇年の時

雲一つない秋空の下、応援団席に掲げられた四軍団のデコレーション。恵那山を背景に映えわたる、グラウンドに整列した生徒との見事な調和。朝礼台に立った瞬間、あまりにも美しい情景に声を失うほどでした。昨年同様、一昨年と同じような光景であったはずなのに今年は何故か格別なことに今年に感じたのです。たぶん生徒も同じような感動を覚えたのでしょう。実際に活き活きと整列していたのです。本校が新制の中津高等学校になった第五〇回目の旭陵祭。生徒諸君は計画段階から例年以上に張り切っていました。五〇回の節目だからと学校が特別働きたかたわけにはありませんが、生徒は自然に意識していったようです。良き伝統とは無言の力が

津高校定時制創立五〇周年記念式典が母校の体育館で挙行されました。戦後の教育制度改革の精神に「教育の機会均等」があります。その大原則にのっとり中卒後就職した青年にも高校教育を受けられるように定時制が設けられました。中心校として本校の他苗木、福岡付知、加子母に分校が設立され、県下では最大規模の定時制となり、その卒業生は三〇〇名余りにのぼります。他の定時制高校では創立記念式など話題になる状況ではない様ですが、和田

すし、段々に事柄が過激な傾向にあるだけに深刻であります。学齢期の子供を持った親御さん、学校の先生の御苦労は、孫の世話を日課にしている人たちは想像もできない位だと思います。二〇年昔自分達もPTAの会合で先生達と議論した事がないに役立ったのか疑問に思えて恥かしく思います。そんな経験からすれば、親と先生との間に意見の不一致を生ずることは止むをえないにしても、そんな議論をくりかえして対立するばかりで、融合出来ないことは生徒のためによくないと思えます。今は情報時代であるだけにあらゆるニュースが飛び交っております。それらのなかには揶揄的であり無責任な事もありま

を感しております。同窓会とは教育原理を議論する場ではなくて、友人同士が会話をするなかで気持ちを取り戻して、持っている力を母校に寄せ、在校生にとって気持ちの支えとなつても重荷とはならない存在であるべきと考えております。今の時代は何かが変わらねばならないと言われます。今は閉塞状態とも言われます。それは体制が活気を失い、只のしがらみとして重くのしかかっている事だと思います。伝統は素晴らしいと言われれば、新しい創造の肥やしとならねばなりません。そんな機能を失った体制は変化を求められます。そんなことを思う時、同窓会はこれで良いのかと常に自問自答しています。母校の創立一〇〇年の時

調にすすんでいると思います。一方、全国的な問題になつてきている中卒者の加速度的減少は本校にとつても大きな課題です。学校は生徒の育成に全力を注ぎ「活力のある学校づくり」に努めておりますが、一層の特色づくりを考えているところであります。四日に挙行した定時制創立五〇周年記念式典のごとでございます。ご来賓旧教職員、数百名に及ぶ同窓生のご臨席を得ての厳粛で盛大な式典、引き続いて行われた俳優田中邦衛さんの講演は一般参加者も加わり会場はあふれんばかりの人となりました。生徒はもとより、職員一同感激いたし感謝の気持ちでいっぱいです。二年前から何度も会を重ね、記念誌の発刊、式典の準備等に当たられた中心校、四分校で組織された同窓会実行委員会の方々をはじめ、多くの皆様のご尽力の賜と心から御礼申し上げます。終わりになりましたが、今後とも皆様のご支援をお願いするともに、益々のご健勝とご発展を祈念いたします。

三年目に思う



学校長 深川美津夫

働くことだと、あらためて感じた次第です。生徒の九五%以上が進学を目指す本校にあつて、赴任以来、教科指導の重視は当然ですが、部活動など教科以外の活動も積極的に推進してきました。そうした方針をうけ、先方も生徒のために献身的に頑張つていてくれます。放課後、多くの生徒が様々な活動を主体的に取り組んでいる姿を見るのは何よりの楽しみです。先に述べた旭陵祭にしても補習や部活の時間をやりくりして、仲間と協同しながら実に素晴らしい、文化性の高いものを創り上げました。そんな生徒の様子から豊かな創造力や自主性が確実に育つていくこと、そして何よりも「学校が生きている」という喜びを実感するのです。学校は地元をはじめ多くの方々に支えられて順

- 新役員紹介
- 関東支部長 坂本 章郎 (5回卒)
 - 関西支部長 中川 鮮 (6回卒)
 - 名古屋支部長 前田寿太郎 (5回卒)
 - 副会長 原 喜久子 (34回卒)
 - 菅原 延郎 (12回卒)
 - 三尾 義彦 (12回卒)
 - 常田 順子 (14回卒)
 - 杉本 潤 (20回卒)
 - 会計監査 小計 卓男 (2回卒)
 - 安保 寿子 (9回卒)
 - 学校渉外担当 木股 久 (10回卒)
 - 花田勝太郎 (13回卒)

クラス会便り

第12回DEF同窓会開催 昭和36(1961)年卒業の第12回生DEF組同窓会を前日から7年ぶりに、今年8月15日に「勝宗」で開催し38名の同窓生が集った。中には卒業以来37年ぶりという顔もあつて、時の経つのも忘れて思



たかつたが、残念ながら古谷良平先生は、平成7(1995)年に、勝野忠夫先生は平成8(1996)年に逝去されて、熊崎公平先生お人の寂しいご出席となつてしまつた。今回は還暦を迎えた平成15(2003)年の夏に持とうと約束しあつて、それまでのお互いの無事と熊崎先生の「健勝を祈つて散会した。(文責 梅村)

糸魚川忠平先生の 叙勲祝賀会

上田 信義(21回卒)

平成十年立春は暖冬とはいえず、梅のツボミが膨らみかけた、去る二月二十一日午後より「中津川高砂殿」に於いて、旭ヶ丘の坂道を戦後の黎明期の昭和二十四年四月より四半世紀の長きにわたり登り下り奉職された、糸魚川忠平先生の叙勲祝賀会が卒業生有志により開催されました。



午前中は薄曇りも、午後からは祝うがように小春日和のような天候となり、受け付け開始とともに遠くは福島県、東京都、石川県、大阪府から百三十一名の所縁ある有志が集り、開宴前ロビーにてグループができ挨拶、名刺交換等にて旧知を温める様子はさながらクラス会のような様子で活動している。「山紫水明」の太鼓の響きとともに糸魚川先生ご夫婦が出席者の拍手のなかご入場、ご着席され太鼓のバチが止まったのち、田口清男さん(19回卒)の司会にて丹羽宏造さん(5回卒)の辞で開会されました。花に彩られたご夫婦着席の難壇には勲章等とともに、有志よりの記念品である筭木茂さん(3回卒)による絵画が祝賀会の雰囲気をかもし出していました。発起人を代表して吉川光彦さん(5回卒)が先生の人柄等を思い出話のなかで触れられ、酒井源五さん(17回卒)より略歴・受賞披露がなされました。そして、常田順子さん(14回卒)より有志による記念品の目録が手渡され、花束が奥様に千早百合子さん(16回卒)より、先生に原貴美子さん(24回卒)より贈呈され、大きな拍手のなか先生の

先生は平成九年度秋の叙勲にて、勲四等瑞宝章の栄を受賞されました。その知らせをうけ卒業生有志にて祝賀会を先生の一大袈裟でなくあくまでも賀素に控え目に「という意向をうけて、市内在住の各卒業年代、化学部OB、サッカー部OB有志にて発起人、実行委員会を組織し準備を重ねましたが、先生の意向通りには思うように行かなくなり、少し軌道修正をし、出来る限り手作りにて和やかな会にと祝賀会当日を迎えました。

な雰囲気顔を赤らめてみえました。教育関係で代表し唯お一人の来賓であられる中津高校校長深川美津夫先生よりスピーチが始まり、各年代を代表して長瀬幸雄さん(3回卒)、秦恵美子さん(4回卒)、中川鮮さん(6回卒)、柘植新さん(8回卒)、松川一郎さん(12回卒)、松納恭卓さん(17回卒)達より戴き、その合間を渡辺洋子さん(13回卒)によるピアノ演奏が宴を盛り上げ、また飛び入りにて演舞、謡曲、ご自身の研究発表、昔話ありの気兼ねない楽しい一時が時問のたつのも忘れさせました。長瀬幸雄さんの指揮で渡辺洋子さんの演奏で全員にて声高らかに「高鳴るや...」と校歌を大合唱し、三井洋一さん(5回卒)の閉会の辞に先生ご夫妻を拍手と握手の列のなかをお送りし楽しく和やかな雰囲気裡に終宴することができました。



見送りながら糸魚川先生の後ろ姿と鉱物博物館を語る熱い思いはまだまだ若々しく、中津高校時代と未だ変わらないと安堵した一日でもありました。尚、記念品としてお贈りした旅行券にてご夫婦だけの東北旅行をこの夏楽しまれたことを、祝賀会にご協力戴きました同窓有志の方々にご報告致しますとともに、先生に所縁ある同窓を実行委員会にて見落とし、ご案内致せなかつた多くの方々にこの紙面をお借りしてお詫び申し上げます。

昭和三十九年、長島乙吉弘三父子二代にわたる貴重な鉱物コレクションが、中津川市、蛭川村及び中津高等学校に寄贈されました。

長島コレクションが とりなす縁

中津川市鉱物博物館館長
小島幸彦(6回卒)



殺中で存在量が少ない元素を含む鉱物や存在量が多量でも、まとまった鉱物を作るものが少ない元素を含む鉱物(この産地と産状をあますところなく示された大著「日本希元素鉱物」(一九六〇刊)は長島乙吉、弘三両氏の二代にわたるご研鑽の成果として高い評価を得ています。中津川市では、寄贈されたコレクションを苗木公民館に一部を展示・公開してきました。中津高等学校では地学室などに保管をし、教材に使っていました。

このコレクションは苗木地方を中心として、日本国内はもとより、中国、北朝鮮、マレーシアなど東南アジア、南北アメリカ、ジンバブエなどアフリカ、ドイツ、デンマークなどヨーロッパ、さらにオーストラリアなどオセアニアまで広がっております。現在もなお、国内では第一級のコレクションとして高く評価されています。

苗木地方の鉱物が全国的に有名であることをご存じない方もおられると思いますので、少し説明します。岐阜県苗木地方は明治中期よりスズ石やトバズ水晶などの鉱物産地として、また希元素鉱物の宝庫として広く知られており、その産物の種類が多いことが我が国第一級のベグマタ

イト(巨晶花崗岩)鉱物産地として有名です。参考までには日本三大鉱物産地は岐阜県苗木地方、福島県石川地方、そして滋賀県田上地方といわれています。さらに、大正期より苗木地方は鉱物学者、化学者、地質学者らの研究フィールドとしてしきりに踏査研究が行われ、学問上もきわめて重要な地位を占めています。この地方を訪れた学者や鉱物マニアは数知れず、全国的に知れ渡っているのです。この長島コレクションを中心として博物館が建設されたのです。

これからは中津高等学校と博物館とはよい関係を保っていきたくと思っています。同窓会の皆さんも是非博物館へお越し下さって、岩石・鉱物に親しみながら、長島父子の研究業績に触れて下さい。

鉱物コレクションの紹介

糸魚川忠平(旧職員)

昭和三十九年春、長島乙吉以下乙吉翁、一八九〇(一九六九)から中津川市長の所へ、戦後子息の長島弘三(以下弘三博士、一九二五-一九八五)とも集めた鉱物標本約一〇〇点を寄贈したいと申し出があり、市長はこれをありがたく受け、その受け入れ準備を進めることにした。その折、乙吉翁は広く故郷の人たち、とりわけ青少年に、鉱物に対する理解を深め親しんでもらいたいという強い願いから、中津高校と蛭川村へもそれぞれ寄贈することを披露した。その後、乙吉翁は自宅(東京千代田区五番町)において、蒐集した膨大な鉱物の整理に精を出し、その年の秋には三ヶ所への引き渡しの段取りをつけ年末にトラック便で搬送する手配をした。

左の葉書は、昭和四〇年正月、私が乙吉翁からいただいた年賀状で、そのときの様子が認められている。

昭和四十年四月、青木敏郎校長が大垣南高校長に転出し、後任に長村新平校長(以下長村)が着任した。長村(坂下町出身)は乙吉翁(苗木出身)と親戚関係にあり、乙吉翁を「長島のおじ」と呼んでいた。長村は東京での学生時代、五番町の長島宅を頻繁に訪れており、又乙吉翁が苗木地方や山口村などへ鉱物探査や採集のため来訪の際には同行していた。そんな深い関係にあった長村が偶々この年中津南高校長として赴任したことを乙吉翁と弘三博士は大層喜び、鉱物標本の受け入れ準備はとんとん拍子に進捗した。

長村は、着任早々長島父子に鉱物コレクション受贈の記念講演をお願いした。快諾が得られ昭和四〇年四月八日、全校生徒二二〇〇名(17回、19回生在学)が聴講することとなった。私の古いノートにこのときの講義メモがあったのでそれを略述しておく。乙吉翁(当時七十五才)は、自分の歩んだ道を回顧して約二十分間、穏やかなユ

モアあふれる話をされ生徒たちの笑いが絶えなかった。

九才の時、中津川の人、高木勘兵衛が東京神田小川町に開いていた鉱物標本・宝石商「金石舎」へ小僧奉公に上がった。長ずるにつれ鉱物が好きになり、鉱物を見分けることがで

けるようになった。二〇才代半ばに独立して鉱物標本商を始めた。その後、私立成城中学博物科教員、理化学研究所飯盛里安研究所嘱託などの道を歩み、後半生は希元素鉱物の探査を仕事とし、本邦新産の鉱物や新産地を明らかにした。又これらの鉱物試料を採取して東大及び理研における希元素鉱物の研究に供し、六八才のときには、希元素鉱物の調査、発見、鑑定功により紫綬褒章を受賞したことなど、最後に「好きこそものの上手なれ」と結んだ。弘三博士が当時東京大学理学部助教は自然から学ぶことの大切さを五〇分間にわたって講じた。

恵那の自然の美しさを称え、自然の贈り物のうちで鉱物は美しく、有益なものの一つであるという話から始まった。かつて訪れたスウェーデンの小さい島にあるYuetty地方の鉱物から希土類元素が約十種発見され、その地名に因んでY(イットリウム)、Zb(イツテルビウム)などの名がつけられた。苗木地方は、苗木石

フエルグソン石、恵那石、サマルスキー石などの希元素鉱物を産し「日本のイツテルビー」であるという話や、花崗岩ベグマタイトに希元素鉱物が多く集まる理由を相図や周期表を用いて解説した。又本邦初産で世界的に珍しい鉱物であるタレン石について、分析法を考案しながら精密な分析値、諸物性を明らかにする仕事を目標としているとのこと、生徒にはやや難解な内容であったにもかかわらず静聴し得たのは、世に静聴し得たのは、世界屈指の卓抜な分析化学者・弘三博士の人柄からにじみ出るひたむきな話しぶり、魅せられてのことなど、本物の科学者をここに見たからであろう。

その他、大阪城と江戸城の石垣について、前者は瀬戸内海産花崗岩、後者は群馬県産安山岩が使われており産地、岩石の種類とも異なることにも触れ、最後に「自然から学ぶ」と結んで多大な感銘を与えた。

寄贈された鉱物標本は、地学の河合正明教諭を中心に理科教室の人たちに整理、収納方法が検討され、この年の夏、発注した特製整理戸棚十個が創工社から納入された。この鉱物標本は、第一

校舎(当時木造一階建て)二階の地学教室に設置することのできた。

その後、弘三博士は学会への往き来を利用して中津高校を訪れ、昭和五三年頃まで十数回にわたって標本ラベルの正確な記載に努めた。これに立ち会った教職員は、弘三博士の研究者、教育者としての誠実な言動に接し、深い感動とともに感謝の気持ちでいっぱいになった。中津高校で長年茶道を教えた庄武志げ子講師は、校内で、寄贈した鉱物標本の仕分け作業に勤しむ乙吉翁を偲んでつぎのような歌を詠んでいる。

(昭和四五年)
部室に響くばいの礦石の中
に笑み給う在りし日を
偲ぶ昨日の如く
弘三博士について藤原鎮男東大名教授はつぎのように述懐している。

(昭和六〇年)
「学問が家と町と国の伝統の中で育つ例を私どもは海外に多く見るのでありすが、長島さんの場合は我が国における数少ないその例である」
ここで家はアマチュア鉱物界のバイオニアである父・乙吉翁を、町は出身地であり我が国唯一の希元素産地・苗木を、国は弘三博士が活躍した東大、東教大、筑波大を無機・分析化学筑波大を指していることは言うまでもない。

「このままでは、福岡町は取り残されてしまう」という危機感を抱いた若者たちをはじめ多くの方々のご支援をいただき初当選をすることができました。住民が福岡町に住んで本当によかったと思える町子供たちに誇りを持って伝えることができる町づくりに向け日夜奮闘して

また、高齢者福祉については、広域で特別養老ホームの建設、ホームヘルパーによる独居老人、寝たきり老人の介護、さらに、介護保険制度の充実にも努めているところがあります。

最近では、環境問題が大きくクローズアップされ、恵北地域の広域で運営しているゴミ焼却場も建替え時期を迎えています。ダイオキシン問題等により移転先の選定に苦慮しているところですが、河川の汚染を防止するため、平成六年から下水道事業に取り組み、巨額の費用を投じ、全戸水洗化を進めるなど環境問題にも取り組んでいるところがあります。

来る二十一世紀に向けて、地方分権、行政改革等の推進、開かれた地方行政運営に全力傾注し、住みよい町づくりに努めています。

直前に、開発チームの一員(情報特許部長)としてこの賞を受賞されました。この賞は、社団法人発明協会が主催し、朝日新聞社、通産省、科学技術庁、特許庁などが後援する表彰で、今回は、化学機械、電気、意匠の四分野で二〇〇件の応募の中からの選考で、優秀な案件として選ばれたもので

活躍する卒業生

住みよい町作り

福岡町長 吉村卓己(福19回卒)



昭和四十六年三月に国立茶業試験場を卒業、家業の茶生産販売業を継承し、無農薬茶の生産に取り組み、良質な茶の生産販売を続ける中、平成三年四月町議会議員に初当選、四年九月勤め、平成八年四月に、「夢のある町の創造 向かって、新しい

今井一夫氏

内閣総理大臣賞を受賞



本校の七回卒業生の今井一夫氏(山之内製薬)が平成九年度全国発明表彰にて内閣総理大臣賞を受賞されました。表彰の対象は、前立腺肥大症の排尿困難障害を改善する薬品の塩酸タムスロシン(商品名:ハルナール)の開発研究です。同氏は本校卒業後、岐阜薬科大学、同大学院を経て山之内製薬に入社され、研究所にて各種医薬品の開発に従事され、平成九年五月、同社退職の



文中の写真は「中津川市鉱物博物館」

追悼

成瀬聖慈さん
文系理学博士 聖ちゃん



前名古屋支部長
天野嘉之(5回卒)
髪だった。電車通学の私はその頃市場に出始めた色つきのナイロン靴下の履いているだけで硬派の先輩たちにビンタを食わされていたというのに彼はどのようにしてワタリをつけていたのだろうか。彼は気象班に入り、私は選科科目選びも終わって初めての数式(当時解析)の授業が聖ちゃんとの最初の出会いであった。私にとっては初めての因数分解を彼はともなげに解いていた。田田の中の私からは彼ら市街の中学からの同級生たちがエリートに思え驚愕したものだった。全員丸坊主の一年生男子の中で彼一人長

追悼

勝野忠夫先生を
悼んで



梅村 薫(12回卒)
五(一)年から三八(一九六一)年までの十年間と、昭和四四(一九六九)年から五三(一九七八)年までの九年間を中津高校に勤められ、個人的には昭和三四(一九五九)年から二年間担任をしていただきました。先生は、権力に媚ることもなく権威におもねることもなく誠に高潔な人生を貫かれました。古今の文学に通じて教養広く、深い知性と温かい心をもって生徒を教育され、多感な

連れて木曾駒高原に遊んだ。二人はカミさんと子供を放つたらかりのゴルフに熱中した。子供が手を離れてからは毎年夏休み夫婦連れで、伊豆・富士山麓・奥三河と遊ぶのが慣わしとなった。畑遣いの仕事や研究についてお互い事細かな説明をすることはなく、相手に理解してもらう方向が間違ってもなく、自分が目指すこととしていないか確認することと、お互いについていなくても研究心を失わないように、刺激し合うことが会合の目的であり楽しみであったように思う。
ある時彼は二人だけの車の中で「オレは本来文系人間だ」と呟くように言った。私は医師として人を研究や仕事の対象にしているが、新しい科学・技術を常に取り入れなければならぬ。聖ちゃんの場合には先に科学・技術を駆使して地球や宇宙の理を解明するが、結果的には自然と人類との共存が必要条件であり、人類を幸せにしなければ科学することも意味がない。文化人類学的な研究思考が根底にあるんだと言わんとしている。理解して納得しない。私は彼の論文の一片すら読んでいない。この度大学の方々のお世話で論文集が出来ること楽しみにしている。
三月二日、高一の時から三日間秋の文化祭の最終日にすぎ焼きをつつきながら青春を謳歌し、酒と煙草の味を覚えた四時庵(同級生菅井養志男君の別荘)で聖ちゃんを偲ぶ会を催すことになった。同級生は文系理学博士聖ちゃん説を承認してくれらるだろうか。

青山フユ先生の近況



千早百合子(16回卒)
青山フユ先生は中津高校で多年にわたって国語を教えられ、その薫陶を受けた卒業生は多い。苗木新谷のご自宅での近況を伺いました。先の十二月で九十歳に成られました。まことに御元気で

松原鐵之先生より絵画寄贈



松原鐵之先生より絵画寄贈
松原鐵之先生より絵画寄贈
松原鐵之先生より絵画寄贈

卒業生文庫紹介

- 【抱山閑話】 自家版 糸魚川切見(旧職員)
- 【木工の世界】 新潮社 早川謙之輔(7回卒)
- 【今日は何のアプローチ?】 ヘルスワーク協会 西尾 和美(15回卒)
- 【衛生・公衆衛生用語辞典】 医学出版社 榎 博(2回卒)
- 【アメリカ文学史講義】 南雲社 亀井 俊介(2回卒)
- 【定型の方法論】 短歌新聞社 大島 史洋(14回卒)
- 【アタル・ト・ドレンと癒し】 学陽出版 西尾 和美(15回卒)
- 【夕映】 自家版 吉田 重(高女20卒)
- 【多ルトルカレシと癒のソラ】 学陽出版 西尾 和美(15回卒)
- 【幽明】 砂子屋書房 大島 史洋(14回卒)
- 【世界の歴史アメリカ合衆国の歴史】 中央公論社 亀井 俊介(2回卒) 紀平 英作 共著
- 【まぶたでてるA.S.S.の日々】 白水社 土居喜久子(6回卒) 土居 巖 共著
- 【語りつくす戦中戦後2】 労働旬報社 歴史教育協議会編 加藤 庄一(旧職員)
- 【マーク・トウェンの世界】 南雲社 亀井 俊介(2回卒)
- 【劈開】 自家版 吉川 和彦(旧職員)
- 【子どもの権利条約学校参加】 法律文化社 勝野 尚行(2回卒)
- 【この欄で紹介の本は同窓会本部・学校図書館へ寄贈いたします。またこの他にも沢山の著作「研究・文学・画集・コミック等」多岐にわたる出版物があると思えます。是非同窓会本部まで一報いただければまた次号にてこの欄で紹介させていただきます。

関東支部便り

関東支部長 坂本章郎(5回卒)

「中津高校関東OB会」の平成十年度大会が、十一月十四日都内の六本木、オリベホールで、母校から伊藤教頭、安藤、花田先生、同窓会本部から郷原前会長、菅井副会長をお迎えし、出席者一三六名とこれまでの最多出席者で盛大に開催された。会は今年度の幹事十二回生の赤坂幹事の司会で始まり、坂本会長より当会の前会長加藤俊平氏が運輸行政に長年貢献された功績で藍綬褒章を受賞されたことを顕彰し、又「めまきたるしい変化とスピードで二十一世紀を目前に我々をとりまく環境は、社会的にも経



赤坂達三三さんは、当会六回生の赤坂幸夫氏の子息で、バリ国際音楽コンクールで一位入賞はか輝かしいコンクール歴を重ね、四〇年来の偉才、と絶賛され注目されているクラリネット界を代表するスーパーソリストである。

ト演奏で、清楚で気品ある音調に会場は陶醉し、アンコールの拍手が続いた。赤坂達三三さんは、当会六回生の赤坂幸夫氏の子息で、バリ国際音楽コンクールで一位入賞はか輝かしいコンクール歴を重ね、四〇年来の偉才、と絶賛され注目されているクラリネット界を代表するスーパーソリストである。予定時間をオーバーして一回、同幹事の指揮、六回生原武彦さんのリードで校歌を斉唱し、井門幹事の閉会の辞で幕を閉じた。趣向をこらした故郷中津の名産「栗きんとん、菊牛蒡」の販売も加わり、青春の若かりしその時、「に舞い戻った楽しい懐かしいひとときであった。会場のオリベホールは、岐阜県が所有の土地を地元が幹事で十一月六日(土曜日)が予定されている。

名古屋地区会の近況

事務局長幹事 大井英夫(10回卒)

第四期 植植会長は、一九九六年十一月二日、名古屋市の愛知厚生年金会館で開催された第三回総会で、各回卒業年度生幹事も併せて選出されました。さらに合計で五回の幹事会を開催し、地区運営についての議論、総会および懇親会の準備をおこない、一九九八年十一月四日「中日パレス」で第四回総会および懇親会が盛況に開催することができました。

長のもので、名古屋地区会会則の一部改正、第五期役員の出立をおこない、新執行部は会長に前田寿太郎(5回卒)、副会長桑恵美子(4回卒)、副会長古井公平(3回卒)さんに、各回卒業年度幹事も継続する方、新メンバーに入れ替る方などさまざまな決定されました。

懇親会は、恩師のご高輪でもお元気な青山フユ先生、遠路四国から来ていただいた高木篤子先生、勲章を戴いた糸魚川忠平先生、さらには小川一平先生、飯田妙子先生と合計五名もの出席をいただくことができました。また中津高校からは深川校長と梅村教諭の方々、各参加者と、楽しい語らいと記念写真会は楽しみの行事でありました。中津川市近郊も含めて、活躍している名産品のメーカーのご協力をいただき、懇親会参加者全員があるさまとまじゅうを食べ、ふるさと銘酒を飲み、抽選で

同窓会本部からは、吉川光彦会長、関西からは中川鮮支部長を来賓として、名古屋地区会の(同窓生一四八名)の出席、総会は、市岡伸幸さんの司会、北峰雄さんの議

同窓会本部からは、吉川光彦会長、関西からは中川鮮支部長を来賓として、名古屋地区会の(同窓生一四八名)の出席、総会は、市岡伸幸さんの司会、北峰雄さんの議

同窓会本部からは、吉川光彦会長、関西からは中川鮮支部長を来賓として、名古屋地区会の(同窓生一四八名)の出席、総会は、市岡伸幸さんの司会、北峰雄さんの議

同窓会ゴルフコンペ 常田 順子(14回卒) 11月3日定例日とした旭陵ゴルフ大会は、今回第5回が開催されました。ほとんどが同期生同士のグループでしたので、プレーも和気藹々とスムーズに進行しました。秋晴れの空のもとで1回生~44回生まで50人の参加で行われました。優勝は昨年を引き続き川瀬英治さん(21回生)でした。(HP-3.6 N-70.4) 2位は成瀬那男さん(3回生)(HP-12 N-71) 3位は幸脇利幸さん(定12回生)(HP-12 N-71) ゴルフは技量を問わず楽しめるスポーツです。同窓生のゴルフ人口も増加しているため、今後もこの回の参加者の輪を拡げ、定着したイベントとして育てていきたいと実行委員一同意思確認をした次第です。 中津川市船子川ユーグリーンゴルフ場 実行委員長 三尾義彦

少子化の流れは中央地方を問わず進み、平成の初め1学年9クラスを数えた本校も平成10年度入学生からは6クラス(英語コース1、自然科学コース1、普通コース4)という時代に入った。これに伴い、教員数は漸減しているが進路指導業務はむしろ増加するという厳しい局面に立たされるようになってきた。従って生徒自身のより自発的・能動的な進路計画の立案と進路決定が求められるようになってきたわけである。 参考までにここ2~3年の具体的な進路希望と進路結果に触れてみると、1年入学時での進路希望はおよそ95%が進学(内四大が80%)、5%が未定その他である。そして卒業時の進路結果は約85%が進学(内四大が50%)、3~4%が就職、10%余がその他である。進学の中身について言えば、国公立大と短大が40名と、私立大が110名とβというところである。学部・学科については、文系では福祉系が増えているが、依然として語学文学系・経済系・教育系が多く、理系では四大は工学・農学系、短大等では医療看護系が中心である。新コースが設置されて2年、もう少し広い視野に立って法学系や理学・医歯薬系に進学してもおかしくない。また、地域も東海地区中心の進学が基本(不況下で已むを得ない一面もある)であるが、将来の就職等を考えると、もう少し関東方面に進んでもよいところである。 また、就職については進学志向の中で公務員以外の希望は極めて少ないのが実情である。ただし、毎年のように3年生の6~7月に至って初めて進路変更をする生徒もおり、進路指導の難しさを感じることも再々である。 一方、目を外に転ずると、来年度入試から国公立大は全面的に分離・分割型に移行し、合格校は完全に1人1校となる。加えて、センター試験の科目増の学校や個別試験の総合問題化の学校も散見され、地方の生徒にとってますます対策が難しくなっている。進路指導部としても、1年次にバスをチャーターしての大学見学会、2年次に個々人の学校見学、3年次の体験入学(看護・ボランティア等)などを推

進路指導便り 奨励し、実物に触れて進路意識を高めようとする努力はしているが、まだまだ十分とはいえない。九十周年の記念行事の折の公開講座のような、諸先輩方にご来臨を賜って後輩たちに針路を指し示して頂く機会を重ねれば、また新たな展開も期待できるであろう。紙上をお借りしてお願いする次第である。 ※分離・分割:試験を前期と後期に分離し、かつ定員を前期と後期に分割する方式 注意点は前期で合格して手続きをすると後期合格の権利がなくなること ※総合問題:たとえば英文の課題文に対する小論文を書かせたり、物理と数学の融合問題を出題するなど、複数の領域を対象とする問題 きて、最近の本校の生徒の進路上の特徴を幾つか挙げる。 ①素直であるが、1人ひとりの力強さは十分とはいえない ②ムードとしての進学希望がかなりある ③2年生までをのんびりと過ごすために間に合わない場合が少なくない などである。いままじ触れると、 ①について:自宅で自主的な学習ができないと休日に登校学習を希望する生徒が多い ②について:断片的な情報は持っているが、真に必要な情報は少なく、目的意識を高めるまでになっていない(無理はしない) ③について:センター試験対策として2年次までに3教科は押さえておきたいが、2教科が限度で、3年次に3教科に絞ってしまう(特に文系の数学)などである。これらをもう一段階引き上げられれば四大60%、センター試験参加90%も可能である。少子化が進んでいる現在、選ばなければ進学はできるが、何をどの先生について学ぶか、があまりない進学は勧められない。結局は自分を見つめ、自分を発見する3年間を保障することである。それこそが母校の一筋「未見の我を見出で」の実現にはかならず、百周年へのエールであろう。(文責:進路指導部)

編集後記 第八号を皆様のお手元にお届けできました。今回は原稿がぐくぐく集まり、当初予定した四ページを六ページに増やすと言う嬉しい誤算もあり、編集委員一同新聞の将来も明るい意を強くしました。現在母校が使われているの寄付によるパソコンが使われており、今後は、同窓会のホームページを開発し、連絡網の充実をはかるという計画もあるようです。新聞も今更以上古里発信の連絡網の核として、発展を遂げて行けたらと思います。 尚、原稿を頂いたのが平成十年、発行が平成十一年となりまして、文中の年次は、原稿を頂いた年次となっております。 T・Y

編集委員 顧問 吉川 光彦(5回卒) 委員 常田 順子(14回卒) 委員 大野 夏(7回卒) 委員 菅井 延郎(12回卒) 委員 阿部 武東(14回卒) 委員 千原百合子(16回卒) 委員 井戸 真二(19回卒) 委員 本 股 久(10回卒) 委員 花田勝太郎(13回卒) 発行 平成十一年一月 岐阜県立中津高等学校 同窓会